

琉球大学 正員 大城 武
琉球大学 正員 ○渡嘉敷 直彦

序論: 連続桁の解法は、種々の方法により確立されているが、ここに提案する解法は、体系的に解法として不十分である差分方程式の応用を述べている。全スパンが等剛比をもつ様な連続桁については、定数係数をもつ連立差分方程式として取り扱い、その解を有限フーリエ級数により求め、又その他の場合には、変数係数をもつ連立差分方程式とし、“Walk-through Method”により数値解を求めている。

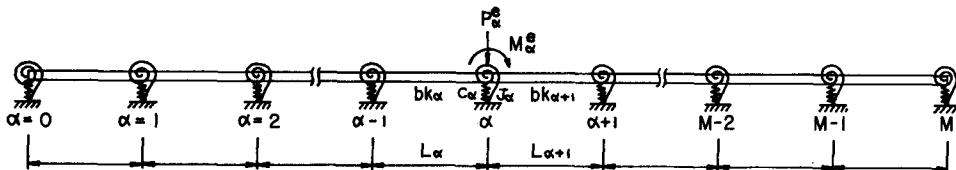


Fig. 1 Continuous Beam with Spring Constraints

Equations of Equilibrium: 一般的な連続桁として、Fig. 1 に示す場合について基礎式を求める。支点における拘束として、垂直変位に対し $C_\alpha (\text{kg/cm})$ 及び、回転に対し $J_\alpha (\text{kg}\cdot\text{cm}/\text{rad})$ のばね係数を仮定している。支点 (α) の釣合いは、Fig. 2 (a) に示してある。ここに、 M_α^R , M_α^L , V_α^R , 及び V_α^L は、たわみ角公式により求まる。支点 (α) におけるモーメント、及び、セン断力の釣合い式は、図よりわかり、それらにたわみ角公式を代入し、無次元化してその式を書くと次のようになる。

$$\begin{aligned} \theta_{\alpha+1} \theta_{\alpha+1} + (2\theta_{\alpha+1} + 2 + J_\alpha) \theta_\alpha + \theta_{\alpha-1} - \frac{3\bar{E}_{\alpha+1}}{\beta_{\alpha+1}} \bar{Y}_{\alpha+1} + \frac{3\bar{E}_{\alpha+1}}{\beta_{\alpha+1}} \bar{Y}_\alpha - 3(\bar{Y}_\alpha - \bar{Y}_{\alpha-1}) &= \bar{M}_\alpha^E \quad (1a, b) \\ - \frac{\bar{E}_{\alpha+1}}{\beta_{\alpha+1}} \theta_{\alpha+1} - \left(\frac{\bar{E}_{\alpha+1}}{\beta_{\alpha+1}} - 1 \right) \theta_\alpha + \theta_{\alpha-1} + \frac{2\bar{E}_{\alpha+1}}{\beta_{\alpha+1}} \bar{Y}_{\alpha+1} - \left(\frac{2\bar{E}_{\alpha+1}}{\beta_{\alpha+1}} + 2 \right) \bar{Y}_\alpha - C_\alpha \bar{Y}_\alpha + 2\bar{Y}_{\alpha-1} &= -\bar{P}_\alpha^E \end{aligned}$$

同様な関係式は、両端 ($\alpha=0, M$) においても書けるが、支点 $\alpha=0$ における結果を書くと次のようになる。

$$\begin{aligned} \bar{Y}_1 \left[2\theta_0 + \theta_1 - \frac{3}{\beta_1} (\bar{Y}_1 - \bar{Y}_0) \right] + J'_0 \theta_0 &= \bar{M}_0^E \quad (2a, b) \\ \frac{2\bar{E}_1}{\beta_1^2} (\bar{Y}_1 - \bar{Y}_0) + C'_0 \bar{Y}_0 - \frac{\bar{E}_1}{\beta_1} \theta_1 - \frac{\bar{E}_1}{\beta_1} \theta_0 &= -\bar{P}_0^E \end{aligned}$$

Closed Form Solution: 各スパンの剛比、長さ、及び、スプリング係数を一定と仮定すれば、有限フーリエ級数解を得る。ここで、両支点上のスプリング係数 (C_0, C_M, J'_0, J'_M) は、内側支点のそれらと等しくなる必要はない。

上記の仮定 ($\beta_\alpha=1, \beta_M=1$) を式 (2a, b) に代入すると $(1 \leq \alpha \leq M)$

$$(\Delta + 6 + J') \theta_\alpha - 3\bar{Y}_\alpha = \bar{M}_\alpha^E, \quad -\beta \theta_\alpha + (2\Delta - C') \bar{Y}_\alpha = -\bar{P}_\alpha^E \quad (3a, b)$$

ここに、二階の差分記号 Δ 及び β を次のようく定義する。

$$\Delta \theta_\alpha = \theta_{\alpha+1} - 2\theta_\alpha + \theta_{\alpha-1}, \quad \beta \bar{Y}_\alpha = \bar{Y}_{\alpha+1} - \bar{Y}_{\alpha-1}, \quad \text{境界条件式 (2a, b) } \text{ は、次のように書ける。}$$

$$(\Delta + 3 + J'_0) \theta_0 - 3\Delta \bar{Y}_0 = \bar{M}_0^E, \quad (2\Delta - C'_0) \bar{Y}_0 - 2N \theta_0 = -\bar{P}_0^E \quad (4a, b)$$

ここに、一階の差分記号 Δ , N を次のように定義する。 $\Delta \bar{Y}_0 = \bar{Y}_1 - \bar{Y}_0$, $2N \theta_0 = \theta_1 + \theta_0$

有限フーリエ級数により、外力を展開し、又同様な級数を、 θ_α 及び \bar{Y}_α に仮定する。

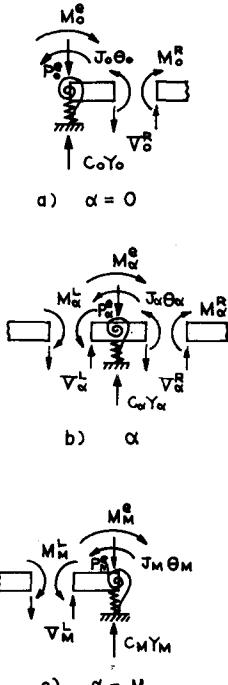


Fig. 2 Equilibrium at $\alpha=0, \alpha, M$

$$\left[\begin{array}{c} \theta_\alpha \\ \bar{M}_\alpha^e \end{array} \right] = \sum_{m=0}^{M+1} \left[\begin{array}{c} \theta_m \\ \bar{M}_m \end{array} \right] \cos \lambda_m (\alpha + \frac{1}{2}) \quad \left[\begin{array}{c} \bar{Y}_\alpha \\ \bar{P}_\alpha^e \end{array} \right] = \sum_{m=0}^{M+1} \left[\begin{array}{c} \bar{Y}_m \\ \bar{P}_m \end{array} \right] \sin \lambda_m (\alpha + \frac{1}{2}), \quad \lambda_m = \frac{m\pi}{M+1}, \quad (5a, b)$$

上記の級数に orthogonality relation を適用するのであるが、この条件は端部 ($\alpha = 0, M$) を含めた範囲で満足される。従って、式 (3a, b) の適用を両端まで拡大しなくてはならない。それに伴い、式 (4a, b) の境界条件も改められる。上記の級数解は、その境界条件を満足しないので、修正を加えることにより解を得る。そのために、修正係数 (λ^1, λ^2) を導入している。式の簡素化のために、 $M/2$ に対して対称のときのみを示す。

Modified Governing and Boundary Equations :

$$0 \leq \alpha \leq M \quad (\Delta + J') \theta_\alpha - 3\beta \bar{Y}_\alpha - \bar{M}_\alpha^e - 2\lambda^1 = 0, \quad -\beta \theta_\alpha + (2\Delta - C') \bar{Y}_\alpha + \bar{P}_\alpha^e - 2\lambda^2 = 0 \quad (6a, b)$$

$$\alpha = 0 \quad [\nabla + (J'_0 - J') - 3] \theta_0 + 3\nabla \bar{Y}_0 + \lambda^1 = 0, \quad [2\nabla - (C'_0 - C')] \bar{Y}_0 - 2\lambda^2 = 0 \quad (7a, b)$$

式 (5a, b, c, d) を式 (6a, b) 及び (7a, b) に代入すると、

$$\left[\begin{array}{cc} 2(\cos \lambda_m - 1) + 6 + J' & -6 \sin \lambda_m \\ 2 \sin \lambda_m & 4(\cos \lambda_m - 1) - C' \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \theta_m \\ \bar{Y}_m \end{array} \right] = \left[\begin{array}{c} \bar{M}_m \\ -\bar{P}_m \end{array} \right] + \left[\begin{array}{cc} \frac{4\Phi_m}{M+1} \cos \frac{\lambda m}{2} & 0 \\ 0 & \frac{4\Phi_m}{M+1} \sin \frac{\lambda m}{2} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \lambda^1 \\ \lambda^2 \end{array} \right] \quad (8a, b)$$

$$\sum_{m=0}^{M+1} \left[\begin{array}{cc} (-3 + J'_0 - J') \cos \frac{\lambda m}{2} & 6 \sin \frac{\lambda m}{2} \\ -2 \cos \frac{\lambda m}{2} & (4 - C'_0 + C') \sin \frac{\lambda m}{2} \end{array} \right] \left[\begin{array}{c} \theta_m \\ \bar{Y}_m \end{array} \right] = - \left[\begin{array}{c} \lambda^1 \\ \lambda^2 \end{array} \right] \quad (9a, b)$$

上記の式 (8a, b) を $[\theta_m, \bar{Y}_m]^T$ について解き、その値を式 (9a, b) に代入し、index m について和を求めるとき、 $[\lambda^1, \lambda^2]^T$ が求まる。これを、式 (8a, b) に入れることにより、境界条件を満足するオイラー係数 θ_m, \bar{Y}_m が求まる。

Walk-through Method による数値解 : この方法による数値解は、変数係数をもつ差分方程式の数値解法として、最も有効なものであるが、その適用が発表されていない。式 (1a, b) から、 $\theta_{\alpha+1}$ 及び $\bar{Y}_{\alpha+1}$ について解くと、

$$\theta_{\alpha+1} = \frac{1}{\bar{P}_{\alpha+1}} \left[-(2\bar{M}_\alpha^e - 3\beta_{\alpha+1} \bar{P}_\alpha^e) + (\bar{P}_{\alpha+1} + 4 + 3\beta_{\alpha+1} + 2J_\alpha) \theta_\alpha + (2 + 3\beta_{\alpha+1}) \theta_{\alpha-1} - 3(2 + 2\beta_{\alpha+1} + \beta_{\alpha+1} C_\alpha) \bar{Y}_\alpha + 6(1 + \beta_{\alpha+1}) \bar{Y}_{\alpha-1} \right] \quad (10a, b)$$

$$\bar{Y}_{\alpha+1} = \frac{1}{\bar{P}_{\alpha+1}} \left[-(\beta_{\alpha+1} \bar{M}_\alpha^e - \beta_{\alpha+1}^2 \bar{P}_\alpha^e) + (\beta_{\alpha+1} \bar{P}_{\alpha+1} + 2\beta_{\alpha+1} + \beta_{\alpha+1}^2 + \beta_{\alpha+1} J_\alpha) \theta_\alpha + (\beta_{\alpha+1} + \beta_{\alpha+1}^2) \theta_{\alpha-1} + (\bar{P}_{\alpha+1} - 2\beta_{\alpha+1}^2 - 3\beta_{\alpha+1} - \beta_{\alpha+1} C_\alpha) \bar{Y}_\alpha + (3\beta_{\alpha+1} + 2\beta_{\alpha+1}^2) \bar{Y}_{\alpha-1} \right]$$

端部 ($\alpha=0$) における境界条件は、式 (2a, b) を適用し、他端 ($\alpha=M$) における条件式は、次のようになる。

$$\bar{Y}_M [2\theta_M - \theta_{M-1} - \frac{3}{\beta_{M-1}} (\bar{Y}_M - \bar{Y}_{M-1}) + J_M \theta_M] = \bar{M}_M^e \quad (11a, b)$$

$$-2 \frac{\bar{Y}_M}{\bar{P}_M} (\bar{Y}_M - \bar{Y}_{M-1}) - C_M \bar{Y}_M + \bar{P}_M \theta_M + \bar{M}_M \theta_{M-1} = -\bar{P}_M^e$$

特殊解として、 θ_P^P 及び \bar{Y}_P^P を仮定し、その値を式 (2a, b) に代入すると、 θ_P^P 及び \bar{Y}_P^P を得る。式 (10a, b) において、 $\alpha=1$ とき、 $\theta_P^P, \theta_P^H, \bar{Y}_P^P, \bar{Y}_P^H$ 及び \bar{Y}_P^H を代入することにより、 θ_P^P 及び \bar{Y}_P^P を得る。同様な計算を繰り返すことにより、 θ_P^H 及び \bar{Y}_P^H を得る。同次解を求めるには、式 (2a, b) 及び、式 (10a, b) の荷重項を 0 おく。

上記と同様に同次解として、 θ_H^H 及び \bar{Y}_H^H を仮定し、式 (2a, b) 及び式 (10a, b) より、 $\theta_H^H, \theta_H^L, \sim \theta_M^H, \bar{Y}_0^H, \bar{Y}_2^H, \sim \bar{Y}_M^H$ を得る。次に θ_H^H 及び \bar{Y}_H^H と異なる θ_H^L 及び \bar{Y}_H^L を仮定し、同様に $\theta_H^L, \theta_2^H, \sim \theta_M^L, \bar{Y}_0^L, \bar{Y}_2^L, \sim \bar{Y}_M^L$ を得る。ここで求める解を次のように書く。

$$\theta_\alpha = \theta_P^P + C_1 \theta_H^H + C_2 \theta_H^L, \quad \bar{Y}_\alpha = \bar{Y}_P^P + C_1 \bar{Y}_H^H + C_2 \bar{Y}_H^L \quad (12a, b)$$

上記の式より、 $\theta_M, \theta_{M-1}, \bar{Y}_M, \bar{Y}_{M-1}$ を求め、境界条件式 (11a, b) に、これらの値を代入することにより求まる。

参考文献 : D.L. Dean & C.P. Ugarte, "Field Solutions for Two-Dimensional Frameworks"

Int. J. Mech. Sci. Pergamon Press 1968, Vol. 10

T. Wah & L.R. Calcote, "Structural Analysis by Finite Difference Calculus"

Van Nostrand Reinhold Co.